

# 中世の謎について

——國語學的考察のもとに——

鈴木 博

## 一 はゝには二たびあひたれども

秋田縣南秋田郡昭和町で採集された謎に

ふわふわにだば、二度逢うども、ででにだば一度も逢わねあ くじろ。 脣

というのがある。『言語生活』38年1月42頁。これは新村出博士が解明された（『東亞語源志』三〇六頁）、『後奈良院御撰何曾』（群書類従第28輯卷五〇四）中の

母には二たびあひたれども父には一度もあはず くちびる

〔注一〕

という國語史上、有名にして興味深い謎の方言に遺存するものである。この『後奈良院御撰何曾』がじつは永正十三年（一五一六）正月廿日の後柏原帝染筆にかかる『なぞだて』（天理圖書館藏。以下、宸筆本と略稱）であることを、

『宸翰英華』（昭和19年刊）の解題に基づいて石川廣氏が確言された（『後奈良院御撰何曾溯源考』——『言語と文藝』36年11月）。これによつて、永正十三年が後奈良帝の踐祚前であることと書名の「後奈良院」との関係についての疑問（湯澤幸吉郎博士『國語學論考』二四五頁）は氷解する。

ところで先の謎が『國語學辭典』一〇七〇頁に、豊原統秋の『體源抄』（永正九年林鍾中旬撰）にすでに見える旨を述べており、このことは石川氏も言及されている。京都府立総合資料館蔵の寫本（十四冊）から引用すると、

ナソタテニ曰

○母ニハ二度アフテ

○父ニハ一度モアワス　クチヒルトトク

（卷十一下19オ、相通事）

しかるにこの謎がさらに六十年近く溯る文獻に出ていることが高橋貞一博士によつて見いだされた。すなわち、奥に「享徳三年（一四五四）<sup>甲戌</sup>十一月十五日書寫了　右筆舜榮」とある叡山文庫（天海藏）の十三卷五冊『聖徳太子傳』第四の十一歳の個所に見えるのであるが、高橋博士の御教示によりつつ、もう一つの謎とともに次に引く。和州高市郡劔池小林園で三十六人の童子達（皇子達や大臣らの子息達）が太子の知恵の深さを種々試みる場面である（私に句讀點を施す）。

……其時童子達、サレトモ思ツル勝負ニハ又負ヌ、不思議ノ太子ノ御智恵ヤ、何ニ思トモ我等力智分ニテハ不可奉叶<sup>一</sup>。日モ晩ヌレハ童子達ハ宿所々々ニ立歸リ玉ヘハ太子ハ橘ノ宮ヘソ御歸有ケル。童子達、無ヤ本意ニ思ハレケン、親々ニ語ラレケルハ、此程太子御一門ノ皇子達卿相ノ息面々ニ寄合テ卅六人ハ一方、太子ハ御獨ニテ様々ノ勝負ノ有ツルニ、多カル童子終ニ負テ一度モ勝進スル事無シ、哀レ、奇シキ事ヲ父母我等ニ教ヘ玉カシ、ト申ケルニ、人ノ親ノ子ヲ思習ナレハ、何事ヲ墓々シク作出シツトハ覺ネトモ各々種々ニ思案セリ。或仁、子ニ教ヘケル様ハ、所見有ン事ハ御智恵ノ深サ、御思慮ノ廣サニハ都テ不可有隱<sup>一</sup>、田夫野人ノ柴ノ庵ノ内、

竹ノ編戸ノ栖ニツカヒ習ハセル具足、詞、振舞ナトハ夢ニモ不被知食、淺猿ケナル下蔭ノ申シ習ハセル詞、振舞用ル事共ヲ童子ニ親々謂教ヘケリ。サテ各々親ノ難勢ヲ受テ使ヲ橘ノ宮ヘソ進ケル。爰ニ太子ハ昨日ノ事思食出シ、何ニ諸ノ童子共本意ヲ失ヒ我ヲ恨ラン、一度モ勝負ニ勝タセネハ親々ニモ語ラント思食ヌ處ニ、彼使者來テ、此間ノ御遊ニ參相ヒ候ツル其御名殘忘レ遣<sup>ヤ</sup>レ候ハネハ、又□ト勝負一□ト存候、劔ノ小林ヘ參合度候、ト申ケルニ、太子ノ御返事ニハ、自是ニ勸申度候ツルニ遮テ承候上ハ急キ御出候ヘ、則罷出ヘシ、ト仰ケレハ、童子達モ面々ニ出ラレケリ。サテ太子ノ云ハク、珍キ勝負一結ヒ設タル由、以使者ニ承候ツルハ何ナル事ソヤ、疾々、ト仰ケレハ、童子達各々何ヨリモ面白氣ニテ、指タル風情何事カ候ヘキ、連日ノ御遊名殘惜サニ參合マテニテ候、ト申サルル時、太子咲ヲ含坐テ、意得タリ、譬ハ此間ノ勝負二度々負玉テ失本意ニ面々ニ宿所々々ニテ語玉ニ父母ノ哀ミノ深サハ何ニモシテ勝セハヤト思テ種々ノ難事ヲ謂教玉ヲ學ヒ覺テ坐スナ、兒ハ決定負ヌヘケレ、推量ハヨモ不違<sup>ニ</sup>、早<sup>ク</sup>、ト仰ケルニ、卅六人皆面ヲ赤メ舌振テ、サレハ何トテ知食シケルソヤ、誰申ツトモ覺ヘス、サスカ御一門ノ君達ハ皆此方ニ御同心アル事也、況ヤ卿相ノ子息達ハ皆此方<sup>サリトモ心替ハヨモアラシ物ヲ、トテ先或童子、太子ノ御前ニ參テ本ヨリ習澄セル事ナレハ、何々ト云事ヲ一結ヒ仕候ハン、ト申サレケルニ、太子ハエミ<sup>ノ</sup>ト打咲ヒ、阿子ハ名字ヲタニ未知<sup>ニ</sup>、其趣ハ何様ナル事ソ、ト御尋有シニ、何々ト申ハ敵方カ難ノ詞ヲ作成テ問時、作成問<sup>ヒ</sup>、其意ニ不替<sup>ヒ</sup>答ヘ候、遅ク答ル時何々ト申ヲ聽テ名字ニ置□□、サレハコソ兒ハ惣シテ意得ヌ事ナレトモ面々本トス□□上者疾々、ト仰ケレハ、此童子、母ニハ再ヒ合ヘトモ、何トヤ父ニハ一度モ不合<sup>ル</sup>、所具<sup>ノ</sup>ニ五鉢六根ノ中ニハ何クソヤ、ト立タリ。太子聽テノ御詞ニ、不思議ヤナ、大段不審也、親ハ一世ノ契ニテ只今生計ナレハ再ヒ難會期、而ニ父ニ一度モ會ヌハ常ニ云習セル事也、付其<sup>ニ</sup>母</sup>

ニ再ヒ會ラン事コソ意得難ケレ、母ニ合ハハ父ニモ合ヘ、難心得ニ事哉、ト打案シ坐テ、人ノ身ノ五骸六根ノ中ナラハ何處ソト立ルナ、ト仰ケレハ、彼童子達、サレハコソ知食レネ、勝ヌルヨ、ト悦テ有シニ、太子ノ御智惠ノ深サハ、ヤ御前達、父母ハ定惠ノ二法、陰陽ノ二門也、世間出世此ヲ離レテ諸法ノ當躰不可立<sup>ス</sup>、委ク云ヘハ長短高下天地晝夜寒熱春秋廣狹方圓、何レカ父母ヲ離レ陰陽ヲハナレタル、サレハ眞言ニハ阿吽二字、金剛力士ノ二王、是モ父母ノ二也、金剛ハ口ヲ開ク、阿一字ヲ顯ス、力士ハ口ヲ塞ク、吽ノ一字ヲ顯也、象父<sup>カヌル</sup>阿字ハ口ヲ塞テ謂ントスレハ不被云、吽ノ字ハ何カニ口ヲ不合<sup>シ</sup>スレトモ合、是母ノ形也、爰ニ知ヌ、母ト云時ハ二度ヒ合<sup>レ</sup>臂、父ト云時ハ一度モ不合、一定臂ヲ云ナ、童子達、ト仰ケリ。此時童子達興覺テアキレテ、不思ノ御知惠ヤ、今ハ何ナル事ヲ申トモ御答可有<sup>ソ</sup>、ト思テ心弱ク思ケル處ニ、或人父母子ヲ勝ト思テ淺猿キ田夫ノ態ヲ教ヘシヲ申ケルハ、白色不動白<sup>ニ</sup>白ノ上ニ座シテ上下隨折<sup>ニ</sup>利生<sup>ス</sup>、打返シテ人躰ニハ何ソヤ、或本ニ白齒居上下<sup>ニ</sup>下ハ不動<sup>ニ</sup>仕上<sup>テ</sup>利生<sup>ス</sup>、打返テ人躰ニ有テハ何ノ處ソヤ、意ハ摺<sup>ニ</sup>摺<sup>ニ</sup>ト云事也、摺<sup>ニ</sup>摺<sup>ニ</sup>ハ隨折<sup>ニ</sup>動トモ、下ハ不動、上ハ動ク、打返テ身ノ中ノ五骸六根何クソヤトハ、有身<sup>ニ</sup>時ハ上ハ不動、下ノミ動クト立タル何々也、人力非所及<sup>ニ</sup>兒ハ更ニ不知名字、何況ヤ、正躰ヲヤ、但了簡ヲ加ルニ、上ハ動キ下ハ不動、隨折<sup>ニ</sup>利生<sup>ス</sup>トハ、世間ヲ養ナイ命ヲ扶ケ利スルハ米コソアレ、サレハ米ニ成スニハ摺<sup>ニ</sup>摺<sup>ニ</sup>ト云物カ下ハ定ヲ象トテ不動、上ハ惠ヲ象テ種々ニ廻リ動ク、是世間出世ノ根本續生<sup>ニ</sup>求道<sup>ニ</sup>源也、サレハ賤<sup>ニ</sup>ノ女賤<sup>ニ</sup>ノ男ノ態ナリ、推スルニ摺<sup>ニ</sup>摺<sup>ニ</sup>トナ、又打返テ人體ノ中ニアラハ是ハ上ハ不動、下ハ動ナラハ、頤ナ、上ノ齒莖ハ動カヌニ下ノ齒莖ハ動ク、兒カ思案ハヨモ不替<sup>ニ</sup>物ヲ、ト仰ケレハ、卅六人ノ童子、所見アル事ハ不及申<sup>ニ</sup>、無所見ニ事ノ無窮ナルヲモ皆答玉ソヤ、人ハ見タル物ヲコソ知レ、不見<sup>ニ</sup>物ヲ知ル事ヤ有、此レ程ノ御事ナレハ中ノ勝負ヲ諍コソ愚ナレ、トテ皆思停リ給ケリ。此童子

達モナヘテノ人ニ非ス、智慧モ深ク才藝モ勝レ玉ヘル御一門ノ皇子、大臣達ノ息男ナルニ、實ニ太子十一歳目  
出カリケル應問ノ利生哉……〔注<sup>2</sup>〕  
(58オ) 62オ)

右の第二の謎はさておいて、第一の謎について永正の頃のなぞだてと比べると、「具する所の五躰六根の中には  
いづくぞや」というヒントが示されている點が異なる。さらに解答への過程では佛教色が濃厚であるのが特徴的で  
あるが、「母と云ふ時は二たび唇が合ひ、父と云ふ時は一度も合はず」と解いて、新村博士と等しくハ行音が唇音  
であることから「唇」という正答を導き出している點は、本居内遠の「後奈良院御撰何曾之解」〔増補本居宣長全集  
第十二卷〕所收の後世的誤答とは異なつて、さすがに謎製作時のものと言えよう。そして『太子傳』の記事から  
察すれば、當時これらの謎が高貴の世界にのみ行なわれていたと限定することができないようであつて、ひいては  
宸筆本所載の

はゝには二たひあひたれともちゝには一ともあはす　くちひる

等、總數一九四(重出一を含む)の謎も堂上世界にもてあそばれたもののみであるとは、必ずしも限定できないこと  
になりそうである。〔注<sup>3</sup>〕

## 二　ゆるりの風

石川氏の説かれているように、宸筆本は類従本の誤りを多く訂し得るが謎の配列順はかなり異なつている。その  
様子は左に檢索の便をも兼ねて對比するがごとくであつて、類従本の祖本はおそらく宸筆本のように數葉ずつ綴じ  
たもの三部を合綴して一書と成してゐて、ある時期にそれぞれの部内ごとに綴じ違いが生じたのではないかと思わ

れる（左表の数字は謎の掲出順を示す番號）。

A		(B)
宸筆本	1—7 8—14 15—19 20—23 24—28 29—	46 47
類従本	1—7 31—37 42—46 38—41 26—30 8—	133 25

B												(c)	
48—52	53—64	65—69	70—76	77—84	89—90	94—95	97—102	103—115	116—120	121—125	126—138	—140	
147(再)													
134—138	47—58	128—132	122—127	59—66	71	116—120	109—121	—115	72—84	104—108	99—103	85—175	—98

C												
141—145	146—151	152—164	165—166	—170	171—172	—175	176—180	181—184	185—193	194		
176—180	161—165	139—151	185—188	—190	152—191	—156	155—160	181—184	166—174	192—193		

宸筆本と類従本との本文の相違から、異なる解きようも考えられる場合がある。

宸 103 ゆるりのつしかせ はいたて

類 72 ゆるりの追風 はいたて

答の脛楯は易林本節用集（日本古典全集。以下、易林本と略稱）も日葡辭書もハイダテと濁る。さて問題から答への道

筋を本居内遠の解は、

ゆるりは圍爐なり。風ふけば灰のたつより、はひだてと解たるなり（傍線稿者、以下すべて同じ。なお私に句讀點を施し濁點を補う）

とし、鈴木堂三氏編『ことば遊び辭典』（以下、辭典と略稱）もこれを受けつぎ、

ゆるりは圍爐裏の訛。これに風が吹きつけば、灰が立つ

とする。圍爐裏は兩足院本節用集や元和本下學集（岩波文庫。以下、下學集と略稱）ではイロリであるが、永祿六年

（一五六三）の抄である玉塵抄（國立國會圖書館藏）に

ユルリノ灰ヲカキダイテ火ヲサカイテアタルホトニ（一19オ。叡山文庫藏本も同文）

などが見え、天正十八年本節用集や日葡辭書にもユルリが見えるから、問題文中の「ゆるり」を圍爐裏の意に取ることができ、さらに「追風」の意を「吹き入る風」（大日本國語辭典の第三義）と見れば、内遠や辭典の自動詞「たつ」（したがって「たて」は命令形）を、他動詞に改め「圍爐裏に風が吹き入つて灰を立て」（連用止め）と解いて何ら支障はない。が、類從本の本文の場合には次のような解き方もまた可能なのではないかと考えられる。それは「追風」を「追ひざまにうしろより吹き来る風」（大日本國語辭典の第一義）の意に取り、「ゆるやかに吹く風が蠅を追い立てる↓蠅立て」（命令形。もつとも連用止めにも見得る）と解くのである。「だらりの帶」のごとくに「ゆるりの風」という表現法もあり得たのではあるまいかと考え、その風は蠅を吹き飛ばすほどの烈しいものではなく止まつているのを追い立てる程度のゆるやかなものであつたと見るならば、當時の蠅の發音がハイであつた證に支えられてこの私解も成立し得るかと思われるのである。

蠅の發音については現在、關東ではハイ、關西ではハエのようであるが（昭和35年5月14日朝日新聞夕刊）、古くはハエであつたことは古辭書類に明らかである（大言海參照）。これが室町期にはハエ（ただしエの音は全般に當時ヤ行のイエの音であつたと見るのが通説。ついでにハ行音がファ行音であつたことはここでは關係しない）と音變化して來ていたはずであるけれども、天草版伊曾保物語（以下、伊曾保と略稱）では全例 *fai* であつて *faye* ではなく、易林本や下學集もすべてハイである。これは例えば、

宸 34 やふれかちやう かいる

の蛙（↑蚊<sup>かみ</sup>入る。易林本「蚊帳」などと同じく、ア段音に後接するエ<sup>ㄟ</sup>音はイ音に轉ずる傾向があつたからである。<sup>〔注4〕</sup>

しかし、宸 103 「ゆるりのつしかせ」という本文では、「ゆるやかな旋風」が自家撞着的な趣を呈するがゆえに、

「ゆるり」を圍爐裏と解する方向でしか解き得ないのではないかと思われる。そして、「つし↓辻↓追」という轉寫徑路によつて類從本の本文の出現が考えられるとすれば、類從本にあつても圍爐裏の方向で解くのがこの謎創作者の意に叶うことにはなるであろう。しかしまた出題者の豫期しない解答でも、當時の言語調度風俗習慣などに違背しなければ正答と認められる場合もあり、<sup>〔注5〕</sup> まして出題文に變化が生じて來ている場合は、かかる可能性をむげに否定し去ることは難しいのではあるまいかと考えられるのである。

### 三 オ段開合の別

室町時代には一般にオ段長音における開音と合音との區別が守られていた。<sup>〔注6〕</sup>そしてエ段拗長音はオ段合長音と同音であつた。したがつて



宸 89 御まへにさふらふ こようまつ

において「御用待つ↓五葉松」の用(よう)と葉(えふ)とが同音として解けるのである。

この開合の別という視點から辭典の犯している解法の誤りを擧げると、

宸 152 兒のかみなきはほうしにはおとりあ中にをけ こいし

において(辭典は類139に據っているが、今の場合本文に重要な違いはない)、辭典は

ほうしにはおとりは、ほうしからはう。(お)を取ることで、しが残つて、こし。

とするけれども、内遠が解いたように「劣り」を「尾採り」と見て、「ほうし」の「し」を採るとすべきである。

辭典のごとき解法のない難い理由は、當時における「法師」の發音が、辭典に考へている開音「はうし」ではなくて合音「ほうし」であつたと思われるからである。天理圖書館藏『謎の本』(以下、謎本と略稱。石川氏から借覽

の原本寫眞による。辭典に付載されているが些少のミスがある。原本は答を問題から離して別にまとめてあるが本稿では續ける)においては、この謎は口頭語的色彩を濃くして

謎 17 ちごにかみはないぞほうし<sup>ホウシ</sup>かみにをくはないかにをけ 碁石

と記されているが、やはり「ほうし」とある。法の字音は漢音は開音であるが、「法師」<sup>ホフシ</sup>(易林本)、「兵法」<sup>ヒヤウホフ</sup>・「法<sup>ホフ</sup>令」<sup>リヤウ</sup>(陽明文庫藏の下學集。以下、陽明本と略稱)など吳音では合音である。このようにして、

宸 110 ほうつき まさかり

を「法盡き↓魔盛り」と解き得るのも、「(佛)法」の音が「山茨菰」<sup>ホウツツヤ</sup>(下學集)と同じく合音だからである。

同様に『宣胤卿記』文明十三年の謎(史料大成42。以下、宣胤と略稱)の

風終成雨聲 香、又セウ、鷹名（一八八頁）

を辭典が誤答して「香または笙」としている（一八六頁）のも訂し得よう。實際にこの謎を解くと「カ＋ウ＝カウ、または、セ＋ウ＝セウ」が得られるが、ロドリゲス日本大文典（以下、大文典と略稱）に

Pera Tacas tem proprio. {Dai. Femea.} vt, Cono tacaua Daica, xôca? (88\*)  
 {xô. Macho.}

と見え、セウ（小）は雄鷹の謂なのである（土井忠生先生譯書三二三頁参照。なお和字正濫鈔に語源を「兄鷹」としている『契沖全集7』一七〇頁）のは、ダイ（大）という雌鷹の稱呼と關連性がない點からも誤りである。さらにまた、辭典に收載洩れの

宸 93 しゆくのけいせい 一こつてう

に對する内遠の次のような解法も、同じ見地から誤りであると見做される（類 119 は「しゆく」を「やど」）。

けいせい は遊女なり。功をつみて手だれの業あるをこつちやうといへり。こは、よく人の心をまどはす意を古狐の人を魅すにたとへ、古狐は頂の毛兀たるよりして兀頂といふ戲語にて、その中にも第一の功者の意にて「兀頂」越調と解たるなれど（以下省略）

當時の謎が二段謎である點から、「一こつてう」に意味をダブルさせて解こうとする方針には賛成であるけれども、頂（ちやう）と調（てう）とは開合が異なるので、到底従い難いのである。〔注7〕

開合の別は謎本においても守られている。例えば

謎 2 ねうはうのむかひかみいはいで 〔注8〕 まり

において、「ねうはう」には「女房」(易林本)——天草版平家物語(以下、天草平家と略稱)や伊曾保でも同様に *ninobō* ——と「子卵方」(ねうほう)とが懸かつていて、十二支を方角に配した場合のネ△北▽とウ△東▽との向かいのウマ△南▽とトリ△西▽との上の音を言わなければマリが得られる。方の字音は、平方の意や藥方のごとき意の時には合音ホウであつたが、方向の意の時には開音ハウであつて(土井先生『近古の國語』三〇頁)、女房の房の<sup>だう</sup>開音たると同様であつたのである。

宮内廳書陵部藏の『寒川入道筆記、謹語之事』(以下、寒川と略稱。石川氏藏の原本寫眞による)でも開合の別は一應守られているようであるが、石川氏が續群書類従本(33輯上)における誤りを書陵部本によつて訂された(「寒川入道筆記の謎小考」——『國語國文』35年4月)中の一つに、あるいは後世の誤寫に基づく混同かと臆測されるものがある。それは

寒63 しゝとらののをきつてかんやうの用にたゝす 何ソ 十六らかん

の傍線部であつて、これは「肝要」の語のながきと思われるけれども、易林本には「肝要」<sup>カンヤウ</sup>とあり、「要」は合音。そして次出の「用」もまた合音で兩者合致して謎が解ける。したがつて傍線部はもと「かんよう」もしくは「かんえう」とあつたのではなからうかと推測される。

#### 四 四つがな

ジヂズツのいわゆる四つがなの混同は、東國では早く鎌倉中期の日蓮の消息に見え(土井先生・森田武博士『國語史要説』九四頁)、天正本狂言(日本古典全書『狂言集』所收)における多數の混亂例も東國語系においてのもの

と思われる。他方、京談語に據ると思われる文献においては、清原宣賢自筆の春秋左傳抄（京大圖書館藏）では「踞シリウタケシテ」であつて（有坂秀世博士『音韻論』二一九頁參照）、確かな例としては天草平家の「貪治」を *giri*（三七六頁）——府立總合資料館藏の百二十句本平家物語（以下、百二十句本と略稱）は「きうち」とする混同な  
どが、比率上微小ながら若干拾える。

さて湯澤博士は『室町時代の言語研究』三四頁に、寛永十五年版蒙求抄（十冊）の四つがな混同例を六例示された（次の①⑦⑧⑨⑩⑪）。それ以外にもなお幾つかの混同例がみいだされるので、併せて示すと次のとおりである。

(一) ジをヂとするもの。

① 嘉禾<sup>カホ</sup>ト云フハ……尚書ニ畝ヲニツニシテ末ノ穗ガマヂツテイネノデキタヲ云フソ（五31ウ）

② 雉<sup>キヅ</sup>ガツレテアルクソ（一1ウ）

③ 迁<sup>ツチウツ</sup>占ヲシタソ（二57オ）

④ 傍<sup>ハウヤクフシ</sup>若無人（三26ウ）

⑤ 憂恤<sup>ユウチニツ</sup>（三32オ）

⑥ 弱冠<sup>チャククワン</sup>ハ二十ノ年ソ（五3ウ）

⑦ 弱冠<sup>チャククワン</sup>ノ年（五14オ）

(二) ズをヅとするもの。見あたらない。

(三) ズをジとするもの。

⑧ 天子ノヨウヂジャ程ニ後ニ侯ニ封<sup>カク</sup>ゼラレタゾ（四2オ）

⑨世話<sup>ハ</sup>ニ勸學院ノ雀<sup>ス、メ</sup>ハ蒙求ヲ囀ルト云ハ李潸カツカウ小女ノ名ヲ雀ト云者ソ其レマデ此ノ蒙求ヲ囀ルソジキノ雀デハ無ソ（一序2ウ）

⑩上書ハ書ヲ直<sup>ジキ</sup>ニ天子ニ奉ツルソ（五19ウ）

⑪鹿ガ氏<sup>ウシ</sup>デヤホトニヨソヘテ云フタソ（七2ウ）

⑫鍛治<sup>カシ</sup>（七13ウ）

⑬軸<sup>シユク</sup>（七14オ）

⑭除<sup>ジユ</sup>（七40ウ）

⑮大丈夫ハ天下ヲコソ掃除<sup>ソウジ</sup>セウズレ（十14ウ）

四ツをズとするもの。

⑯或作<sup>レ</sup>鯖<sup>サバ</sup>々ハ魚ノ名ソ赤作<sup>レ</sup>𩺰<sup>セツ</sup>ナマズト云フ説モアリ（四62ウ）

これらの諸例の中、②③④⑤⑥⑦⑩⑪⑫⑬⑭⑮は漢字に付せられたふりがなの中での混同であつて、これらのふりがなのほとんどすべてが兩足院その他に所藏されている古寫本や古活字本に存しないところからして、寛永十五年版の梓行者によつて施されたものであり、したがつてもしもこれらをもつて四つがな混同の徴證とするならば、寛永十五年頃においてであるとしなければならぬであらう。次に、⑧は兩足院藏の現存三冊寫本に

天子ノヨウチチャ程ニ後ニ侯ニ封セラレタソ（上ノ下24オ）

とあつて、抄者自身は混同してゐなかつたと認められよう。さらに、①は陽明文庫藏本（寫本五冊）を見ると

嘉禾ト云ハ……尚書ニ畝ヲニシテ末ノ穗カ一ニナツテイネノテキタヲ云ソ（三29ウ）

とあつて、もと「一ニナ」と書かれていたのを「マチ」と誤讀（誤寫）したことに基づくものと考えられる。もちろん、かような四つがなの混同例が寛永十五年版十冊本に生じることについては、當時の一般口頭語の世界にすでにある程度の混同がおこなわれていたからと思われる。さいごに、⑨の「ジキ」と⑩の「ナマズ」については、本来は「直」や「鯰」の意でなく、清音の「シキ」へ式 $\vee$ ・ナマスへ膾 $\vee$ ではないかと思われる。すなわち先掲の兩足院本には、それぞれ

世話ニ勸學院ノ雀ハ蒙求ヲ轉ト云ハ李辭カツカウ小女ノ名ヲ雀ト云者ソ其マテ此蒙求ヲ轉タソシキノススメテ  
ハナイソ（上ノ上3オ）

或作<sup>レ</sup>鯰<sup>ニ</sup>々ハ魚名ソ亦作<sup>レ</sup>脏ナマスト云説モアリ（上ノ下64ウ）

とあつて、「シキ」は、本式とか本當などの意味で、中世の抄物などで左のように用いられている語である。

此ノ女ハたけ二三寸ばかりの小女 $\vee$ ガノチニ式<sup>ジキ</sup>ノヨウキナ人ホドニナツテ（玉塵抄、八38オ）

文章ハシキノ文章ニアラス、文ノウツクシイ、アヤ、レウランソ（古活字版莊子抄一23ウ）

〔注9〕

以上の検討によつて蒙求が室町期に講抄せられた際には、四つがなの混同はなかったものと考えられる。

さて謎集について見れば、混同例が宸筆本になく、謎本と寒川にある。まず謎本の

謎156 座頭のれいかへし みつ<sup>い</sup>れ

は「見<sup>ず</sup>十<sup>れ</sup>い（禮）の逆」↓「みづ（水）入れ」と解かれるが、とすると、

謎25 みなとく<sup>の</sup>筆のあと つつ<sup>ぢ</sup>

においても「津々字↓躑<sup>つ</sup>躑<sup>ぢ</sup>花（下學集）」から、傍線部「ぢ」を簡単に「じ」の誤寫と見ることは尚早の感を免れ

ないことになり、近世初期の寫しとされる謎本のかような混同例は、辭典の二段なぞBから拾える次引の『新がわりなぞづくし』の

座頭の禮儀 水鏡〔↑見ず屈み〕

など近世の謎の書に見られる十例ほどの混同例の、より早いものとすべきであらうか。次に寒川の

寒81 君とだに枕たにもならへぬになとなみたのさきにたつらん 何ソ ねづなき

は「寝ず泣き↓鼠鳴き」と解かれるが、鼠は伊曾保にはネヅミの例も二例見えるけれどもあと多くはネヅミで『吉利支丹文学集下』二四九頁頭注参照）、易林本もネヅミである。したがって答の傍線部は、むしろ「ず」とあるのが望まれるからこれは後世の誤寫かも知れない。けれども、また『寒川入道筆記』は記事中に例えば「文亀二ヨリ慶長十八年迄百十二年也」（續類從本一〇頁）のように、慶長十八年までの年數を記した個所が一再ならずあるのでその頃の成立かと推定されるが、記事中の斷定の助動詞「ぢや」はすべて「じや」のように記されており、<sup>〔注10〕</sup>加えて左例では「字」を「ぢ」と記す混亂も見えている。

らはとの様のらの字。びはかみさまの彼びのぢシャト。いらぬ事に氣をつけたの（一八頁）

これを併せ考えると、善本の出現を待ちつつ一應は寒81についても四つがなの混亂と見ておくことにしよう。

## 五 音の清濁その他

音の清濁が、時代によつて相違することがあるのはあらためて喋々するまでもないが、當時、清濁兩様に發音されるものもあつたようで、例えば副詞「やがて」は清音形も天草平家に yacate（一二頁）と見える（姉崎正治博士

『切支丹宗教文學』の序言、ならびに森田博士「日葡辭書の軌範的説明」——『國文學攷』35年5月84頁——を参照）。宸筆本の  
中からこのような語を拾うと

宸 82 川かせ みつふき

の答の「ふ」を湯澤博士は清音に、辭典は濁音にするが、耶蘇會版落葉集（高羽五郎氏翻刻本。以下、落葉集と略稱）  
には清音「水入草」、易林本には濁音「水蔭」で出ている。

しかし

類 146 ふみ こしがみ

の答の「し」に類従本が濁點を打たないのは、易林本（二五八・二二八頁）や日葡辭書補遺に「巾子」をコジと濁る  
のに従うべきである。下學集「ゴシ」（八七頁）は元和版本における濁點の打ち違いと見るべきであろう。さてま  
た、

宸 40 御おんはくたい ふちたか

宸 131 よせ手のひかこと しやうり〔注12〕

の傍線部のごときは、類従本では濁點を施して「ばくだい」・「ひがごと」とするけれども中世においては清音で  
あつたと思われる。バクタイと清んでいる證は陽明本・文祿元年天草版吉利支丹教義（本文および和げ）・大文典等  
に（文化七年八一八一〇〇刊の『蘭語譯撰』も）、清音ヒガゴトの證は落葉集等に、そして兩者の證が天草平家・日葡辭  
書・易林本・下學集などに見いだされ、濁音の明證は見いだされ難いのである。

力行唇的拗音のクワは當時一般にはまだ直音化していなかつたので、これらの謎集においてもクワ↓カの例は見



當たらぬ。もつとも、

寒 78 あの花はなにはなそ すいせんくわ

を辭典のように「推せんか↓水仙花」と解くならば、クワ↓カの例となるけれども、この解法では問題文中の「花」が解きの過程に生かされていない。したがつてこれは「推せん花↓水仙花」と解くのがよいと思われ、クワ↓カの例とは見得なくなるであらう。

オ段音とウ段音との相通例については目下のところ確かなものは見いだし得ない。石川氏は

宸 59 ふゝりはうす なけし

の「ふゝり」を「はふる」(投げる意)の母音相通の一例のように見られたけれども、當時ウ段長音と交替しているものの中にオ段開長音もあるかどうかという點に疑問が抱かれる。百二十句本にはオ段合長音をウ段長音のごとくに、そしてオ段合拗長音をウ段拗長音ふうに表記している、「くうずい」△洪水▽・「むゆう」△無用▽・「ゆうせう」△幼少▽・「きう」△興▽・「しうこ」△證據▽・「しうそく」△消息▽・「しうふ」△勝負▽・「しう」△訴訟▽・「ひうく」△渺々▽等々の例は見いだされるけれども、開長音をウ段長音のように記したものはないようである。ただ蒙求抄に投げる意かと思われる語を「エホヲラヌソ」(寛永版十31オ。陽明文庫藏の寫本および古活字七冊本も同様)と合音のように記した例がある。あるいはこの動詞は當時合音に近く認識されていたかと思われる。<sup>〔注14〕</sup>辭典では「見出し語は現代かなづかいによつて」(例言)いるので、

宸 22 らうそくのさきはたいの中にあり たらひ

のような謎は「ろ」部に入れている。けれども蠟燭は、下學集(八五頁)にラウソクとかなづけされているほかは

當時ラツソクの形の方がむしろ普通で、兩足院藏の日本書紀抄（文明十二年吉田兼俱の講）に

上古ハラツソクハナイ、鹿苑院トノ御時内々ノ院參ノ時ナトハラツソク、上古ハ松明ソ

と見え、日葡辭書・易林本・下學集（二一六頁）・一六二三年刊の『ロザリオの記録』（ローマ字本による。木下奎太郎氏『其國其俗記』では三七二頁など）等にも出ており、そして片言に

蠟燭ろうそくをらうそくと書て口に唱ふるはらつそくよしと云り（日本古典全集 六〇頁）

とあるので、當時この謎を口頭で誦する場合には「らつそく云々」と言つていたかと推測される。

以上のほか、かな表記と音との關係をめぐつて取り上げるべき事柄は、なお幾つかあるけれども省略する。

## 六 語法に關して

類従本において係結びの呼応してない唯一の例である

類 111 京中にてぞ夜あけぬ 〔注15〕  
五條けさ

は、宸筆本では「ぞ」がないので係結法と關係がない。また類従本における

類 89 にくさにさりぬさりながらわすれぬ 軒のしのぶ

という打消「ず」の唯一の連體止めの例は、宸筆本では古格を保つて終止形である。ただし文末を二段動詞で普通

に終る場合は、宸筆本も類従本もすべて連體止めで、〔注16〕謎本や寒川でも同様の狀態を呈している。そのほかには口頭

語的色彩の濃厚な

宸 83 なせにゐいた しいたけ

が類従本も同様に「た」形である。類従本で「たる」形止めの

類 38 ほうしやうが刀にひをながくかいたる ほうづき

は、宸筆本では係結びになつていて

宸 20 ほうしやうかたなにひをそなかうかいたる ほうつき

とあり、謎本に至ると

謎 47 ほうじやうがかたなにひをなかうかいたる ほうつき

と變化している。右の例で知られるように全般を見渡しても、宸筆本の古格は類従本でやや崩れ、謎本では口頭語的な色合いが比較的濃くなつてきている。

文末を完了「たり」で終るものは宸筆本に四例、謎本には「たり」無く「た」で終るものが總計十一例あり、この點、寒川も同様に十八例が「た」で終る。文末を打消の助動詞で終るものは、宸筆本「ず」六例・「ぬ」〇、謎本「ず」二例・「ぬ」五例、寒川は問題文に「ず」三例、答に「ぬ」一例(87)である。

形容詞連用形における原形とウ音便形との出現度數は、宸筆本の1—2(副詞「かう」を加えれば3)が類従本では3—0、謎本は0—4、寒川は用例がない。またウ行四段連用形に助詞「て」等が下接する場合の原形と促音便形との出現度數は、宸筆本は9—2、類従本9—0、これに對して謎本では逆に4—9、寒川も同傾向で1—4(ほかに不明4)であつて、謎本および寒川における様相は宸筆本の側とは全く對蹠的である。

抄物やキリシタン物の調査結果によれば、室町時代の口語においてバ行四段・マ行四段の連用形が撥音便になるか、ウ音便(實際は長音便)になるかは、原則として語幹の末音がウ段音であるか否かによるという傾向があつたが、

謎本には語幹の末音がウ段音でない〔そして語幹が一音節でもない（大塚光信氏「バ四・マ四の音便形」——『國語國文』30年3月參照）〕のに、撥音便になつてゐるものがある。

謎85 香爐ころんだ ひとりね

同じ謎が寒川（58）にも同様の撥音便形で見られる。東國語資料として著名な雜兵物語（岩波文庫）では、バ四・マ四の音便形はいつさい撥音便であつてウ音便の明證がないので、もしこのことが東西兩方言における顯著な對照の一つになり得るのであれば、右の謎の撥音便形は東國語脈の混入ではあるまいかと想われる（「ころぶ」という語自體は、蒙求抄・三略假名抄・蠡測集などの抄物にも、また雜兵物語にも使われている）。

謎本における注目すべき現象として、さらに斷定の助動詞「だ」の使用がある。

謎106 そそとありけど田はにこる さしあしだ

これは「差し足だ」→「指足駄」と解かれる。「だ」は抄物にも、例えば

夫ハ何デモナイ事ダソ（蓬左文庫藏、江湖風月集抄、一）

クギカスガイヨヒンヌイテノケタ事タゾ（西教寺藏、本則私抄、20ウ。この書は關東語系かと思われる）

のように見えるが、東西にわたつて使用されたようである（大塚氏「ダとある種の抄物」——『國文學攷』34年7月）。

そして前記の謎が辭典一四八頁の『御所なぞの本』の同種のもの先の蹤たり得るや否の點で後考を待たなければならぬので〔實永三年（一七〇六）刊の『御所なぞの本』に寒川よりも一時代前の形と見られる謎があるという（辭典八二八頁）〕、速斷はできないけれども、謎本の他の事象と併せ考える場合にこの「だ」は東國語系である可能性を増してくるようである。<sup>〔注18〕</sup>

ついでをもつて石川氏の校訂された寒川の

### 寒32 寒ル囊 なんそ 看經

の傍線部についての、氏のサマル・サメル・サエル・コゴエルなどの訓み（前掲『國語國文』四八頁および35年6月13日付の補正プリント）に對して卑見を呈出したい。宸筆本や謎本でラ變の終止形を「あり」としているのに對して、寒川で「ある」と四段化している例はある（寒27）けれども、下二段が下一段化している用例はこれらの謎集のどこにも見當たらないうし、『寒川入道筆記』の記事中においてもこの點は同様なので、下一段に訓むのは賛同し難い。私見としてはコユル（ヤ行上二段。ここえる意）またはコゴユル（ヤ行下二段）と訓んではどうであろうかと思う。「寒」字にコユの訓が古くから存することは亀井孝教授が萬葉集八九二番の一節「飢寒良牟」を「うゑこゆらむ」と改訓されるに當たつて、東大寺諷誦文稿や仁德紀などから多くの文證を擧げて論ぜられたところであるが（萬葉27年7月）、抄物にも

サキニ寒タルマネシテ汝ヲミル時（京大國文研究室藏、燈前夜話、下）

等のようにこの訓みは繼承されている。一方また、抄物にはコゴユルという訓みも用いられており寛永版の蒙求抄に「寒<sup>コ</sup>ヘテ」（五27ウ）と見えるし、かつ日葡辭書からこの動詞を検索することもできるのである。

## 七 語の意味などについて

宸筆本の答の語の意味に關して次にすこし述べよう。

### 宸121 はちのなかのかいさう しめし

中世の謎について

宸 96 みたらしのみそき たらし

前題において「海藻は萬葉集（六五九番）以來「め」、答を内遠のように「しめじ」（菌の名）と見るのはどうであらうか。大言海にはこの菌名を「しめぢ」「しめじ」と記す双方の文證を擧げているものの、見出しから察すると「しめぢ」に賛しているようで、易林本にも「卜治」（草木門）とある。したがって答の語を大辭典（平凡社）所引の袖中抄「夏の異稱」と見るならばともかく、當時通行の運歩色葉集や易林本に「濕布」と出ているところからしては、辭典のようにこの「おむつ」の意と見る方がよからうと思われる。後題の答の「たらし」について内遠の「弓の事」とする説を辭典は採らずに「だますこと」とするが、なお一步を進めて日葡辭書に説くごとくに、そして天正本狂言に見られる

たらし 一人出て、さし笠をうる（末ひろがり。二四七頁）

等の用例などからも「詐欺師」としたいところである（「たらし」は「すつば」よりも古い狂言ことばである（表章氏——右の書二三三頁）。また、

宸 185 あかしのうへきりつほの更衣にはおとり すまゐ

の答の意味は、相撲（すまひ）よりも住居の意の方の可能性が一層濃くはあるまいかと思われる。というのは、徒然草五五段の「住まひ」の「ひ」を諸本「ゐ」とし（山田孝雄博士校注本四二頁）、閑吟集一五八番（日本古典全書『中世歌謠集』一〇八頁）でも同様に「すまゐ」とあり、百二十句本に「すまひ」と共に「すまゐ」とも記していて、中世では和語「家居」（徒然草十段）、「たちゐ」（閑吟集三三六番）などの「居」文字に引かれ、「住まひ」は一般に「住まゐ」と記される傾きがあつたように思われるからである。<sup>〔注19〕</sup>

宸筆本において人名地名を答とするものが各三題あるが〔宸186「むさし野ははてもなし　むさし」の答の意は、

遊戯の「八道」〕（下學集態藝門）と見る、その中の

宸31　みやつかいかひこそなけれ身をすてゝしはさかさまにひくはなにそも　八はし

の答の意味は、伊勢物語で有名な、そして右の謎の記された時よりも二年後に成立の閑吟集（二一四番）にも見える愛知縣の地名と考えられるほかに、名香の名（日葡辭書補遺）とも見得る。ところでもしこの謎歌が源三位頼政のことと言うとすれば、宸筆本には平家物語に取材したものが四題あることになるが、その平家物語の、頼政と嫡子

伊豆守とに關係した

宸182　宇ちはしのうへにていつのかみはうたれぬよりまさはかたなおとしぬ　うつまさ

という謎については、頼政が宇治橋の合戦の際に刀を落した事を明記したものが管見の及ぶ範圍の平家諸本中にはない。したがつて當時そのような話が傳えられていたのか、それともまた、謎を作る上でかような文章にしたのかは審かにし得ない。〔注21〕事実と合うか否かに拘泥せずに作られている例としては、たとえば次のこときがある。

宸102　うほとる鳥の物わすれ　うとむ

右は安田文庫藏狂言八番『椎園』第一輯）に

それがしはみやうがをたぶるによつてどんになつて物わすれして（どんごんさう）

とあるのなどによつて、鶺鴒↓鶺鴒（易林本・陽明本）と解き得るけれども、鶺鴒はほんとうは物覚えがよく、鶺鴒舟に引上げられた際の休み場所は古い鶺鴒から順番になつていて、他のものの所に止まるとつつついてのかせるし、ほつておいても自分の籠にはいる由である（昭和33年7月6日朝日新聞朝刊）。もつとも、宸182の事実については長門本平

家物語（國書刊行會）に、「矢だね皆つくして太刀をぬいて走りまは」つた頼政が自害の場で、

わたなべの丁七となふをよびて首をうてといふ、主の首うたん事さすがにかはゆく覺えて御自害候べしとて太刀をさしやりたりければ入道太刀をぬきて（二八七頁）

とあつて、頼政自身の刀を合戦の時にどうかしてしまつたのではあるまいかと疑われるようなふしが見える。

ところで謎本には語彙に關して注目すべきものがある。それは

謎40    ねこか見えぬ    こまいぬ

の傍線部で、飼猫を東國では「こま」「ねこま」の上略）と言つたことが物類稱呼に見えるからである。辭典一六二頁の、天和の刊かとされる『なぞのほん』以下の近世謎書の

猫の留守    こま犬

よりも、もしも右の謎の先行することが明言できるのであれば、謎本にはすでに見てきた他の語學的特徴と總合して東國語の混入を認め得ることにならう。この意味で謎本傳來の足どりの明らかにされることが望まれるのであるが、天理圖書館の島居清氏（現、親和女子大教授）の御教示によれば、伊勢龜山の石川家藏のものが明治二十年に美作鶴田の松平家の藏となつたが、石川家以前のことははつきりしない由である。

## 八 私解若干と謎本の特徴のまとめ

謎の解き方の面で、先學が必ずしも充分には説き及んでいないように思われるものの幾つかについて、以下に私解を述べてみよう。



宸 106 をくひやうむしやのいくさひやうちやう ひきゝ

宸 178 四季のはしめ月のおはり 花扇

宸 188 くるまのうへにこしはおとれり くし

宸 26 あらしは山をさつて軒のへんにあり かさくるま

類 188 さるくりまはす くすり

宸 106 は「挽木」への導きを、内遠や辭典は「引き氣」からするけれども、宸 60 「戀のひやうちやう あふき」を

「逢ふ議。あふぎ扇」とする類例により、「引き議」からと見た方がよからう。宸 178 は辭典に收載洩れであるが、宸 45

「四季のさきにおにあり、はなあふき」の解き方と全く同様に「はる・なつ・あき・ふゆ」のおのゝの頭音に「つき」の末音を加えればよく、内遠の「花逢季」(花逢鬼)説は迂遠であらう。宸 188 の「おとれり」は内遠が觸

れているように「尾探れり」と見て解けばよいのであるが、辭典にこの意を「劣れり」と見ているのは私見では「躍れり」としたい。宸 26 の「へん」には「偏」のほか「邊」の意も懸かっていると見られるが、内遠・湯澤博士・

辭典ともに觸れていない。問題文中の一字一句も忽せに見過せないものの例については、宸 94 「さゝかきわけてしかやふすらむ さしかさ」の傍線部が「搔き」と「書き」との兩意を有し、また、宸 180 「むらさきのうへのかくれ

しみきりに源氏のととめしはいかに 紙」の傍線部が「砌」と「右」との意を併せ含むときがある。類 188 〔注23〕

は宸筆本に存しないが、題意は「猿を繰り回す」とも「猿が栗を回す」とも取れよう。ところで解き方について内遠・三澤諄治郎博士「中近世の謎について」(『甲南國文』34年2月)・辭典はいずれも「猿」は單に「去る」とかたづけている。『新撰何曾遊び背紐』のごとくに「山の猿くり回す」とあるのならば、そう解くべきであらうが、類

従本の本文のままで解こうとするのであれば「離る」と解し、「く」と「り」とを離し「間は、す」と挿入すればよい。内遠は

(上略) 猿は去る意にて取除きて、あるもなきも同じく、ただ栗まはす形容にくはへたるなり。されど山猿とか飼猿とか上になほ語ありたし。さすればその語の去ることゝなりてよきを、去る意をたゞちにその猿の字とする故に、かへりてまぎらはしくきこゆるなり〔無窮會神習文庫藏本25ウ(石川氏藏の原本寫眞による)。活字本にはすこしミスがある〕

と述べているが、私見のように解くならば謎の作り方として完璧で内遠の難は却けられるべきであると思われる。

次に辭典所載の他の謎の中で卑見のあるものにすこし觸れよう。宣胤の

氷の上魚躍て孝子の例いをのこす 孔子、又、小牛(一八八頁)

は、辭典の「魚躍る」を轉倒する意にしてヨウとする解き方ではなく、「躍る」を「尾(あるいは單にヨの音)取る」と見て、ウヨからヨを取去るとすべきであろう(「躍て」を辭典は促音便に讀んでいるが、宣胤の用例からは原形に讀むべきである)。また近世の『風流新撰なぞ盡し』等の

闇の夜に鬼の算盤そろばん 鞍馬山

も辭典の「暗間算」からでなく「暗魔算」から解きたい。

謎本には音(母音・長音・撥音)に關するものが數題ある。

謎59 田中に月をなかむる うたひ

「なかむる」には「眺むる」と「長むる」とが懸かっている。タを中に入れ、前後にツとキとを長呼した場合に得

られる母音のウとイを置けばウタイ（謠ひ）となる。

謎 131    しのひかへし    いし

「し」が延びればシイ（長音）。これを返してイシ。その他、42「かたはねの天狗やみにいる    かんたんの枕」等については一々説くを必要としないであろうが、異色的な事象として撥音「ん」を「む」(m)の音として解くものがあることを述べておこう。撥音を「む」とも表記している例ならば、宣胤の「けんちやうじのさむ門ニちやうもんもなし門もなし    源氏の一門」(一七四頁)や宸筆本にもあるが、謎本では解きの上で、ン↓ムとするのである。すなわち

謎 136    かんきよすみかたしよを捨てかなし    むぎ

は、「閑居住み（清み）難し」で濁音化し、ヨを捨てカ無しでムギ。同様にして

謎 51    ばんじやうかれ木にのぼる    むぎ

謎 112    天地の間五寸    むこ

も解かれようが、「五寸↓ゴ清む↓コ」に至つては、「寸」の字音を和語の「清む」へ通じさせようとするものである。これらのように撥音をムと見なして解くのは、辭典所載の『御所なぞのほん』の

山と寺と軍して山は勝れり園城寺は劣れり武者無きが故なり    楊枝

においても、オムジャウジからオとムシヤを取去つてウジを残す方式に同じく見られる。以上の、閑・番（謎51「番匠」の）・天・寸・園の尾音は、廣韻によればいずれもn音であつてm音ではない。したがつてこれらは全く謎立てそれ自體のためにン↓ムとしてゐるのである。

最後に、上から見えてきたところから謎本に關する特徴を取出すと次のごとくである。

(a) 四つがなの混同がある。

(b) バ四の語幹（二音節）の末音が才段音であるのに、連用形が撥音便になつてゐる。

(c) 斷定の「だ」が用いられてゐる。

(d) 飼猫の意の「こま」という語が使われてゐる。

その他、

(e) 文末を完了「たり」で終るような場合はすべて「た」形で終止してゐる。

(f) 打消の助動詞で終る場合にも「ず」よりも「ぬ」の方が多い。

(g) 形容詞連用形においては原形の使用例なくウ音便形のみ使われている。

(h) う四の連用形は原形よりも促音便形の方が二倍ほど多く用いられてゐる。

(i) 謎の作り方、解き方において撥音ンをム(mu)と見做すものが三題ある。

(j) 音に關する謎が他の書よりも多いようである。

以上のうち、はじめの(a)(b)(c)(d)は謎本の中には東國語脈による謎が介在してゐるのではないかと思わせる（ただし謎本には、辭典所載の近世の謎書に散見する打消助動詞「ない」の用例はない）。そして(e)(f)(g)(h)は、口頭語の色彩の濃いものが宸筆本よりも多く收められてゐることを示すであらう。

(e)の「た」の常用については、あるいは(a)(b)(c)(d)から窺われる東國語的要素の混在と無縁ではないと見られるかも知れない。「た」の早い例とされる院政期の

時來ぬとふる里さして歸る雁こぞきた道へまた向かふなり（藤原爲忠朝臣集）

は、金葉集の連歌に、

みたりける所の北のかたに聲なまりたる人のものいひけるを聞きて

あづま人の聲こそきたに聞ゆなれ 永成法師

みちの國よりこしにやあるらむ 律師慶範

とあるのと同様に「北」との懸詞にするためであろうと説かれるが（吉澤義則博士『國語史概説』一七七・二一二頁）、流布本平家物語の

猶殿の、食時にまればわいたに、物よそへ（卷八「猫間」）

と併せて考える時、「たるみち」「たるに」の單なる連體形語尾「る」の脱落でなく、ちやうど「なんなり」「あんめり」等におけるう行音の撥音化現象におけると同様に、後續するナ・マ行音の影響が溯及して直前のラ行音が撥音化し得る可能性があつたと考えられもする。平曲でこの個所をかつてどのように發聲したかについては不明であるが、そのかみ、前記の和歌を朗誦する場合には、したがつて、「きたんみち」「きたんに」とでも微妙に詠ぜられたのではなからうかと臆測されるのである。ところで右の金葉集からの引例の點線部が、「來し」に「越」をかけ、この連歌で京都語の「來し」と東國の「來た」とを對比させているところから、「た」は關西よりも關東の方に早く生じたのであらうと佐伯梅友博士は言われるが（『國語學』42年6月の金田一春彦博士論稿46頁所引などに據る）、前引の平家物語の用例も、木曾義仲のことばにおける關東語の様相を寫し出そうとしたものと考えられる。とすれば、謎本における「た」の常用がこの書に介在する關東語的要素と必ずしも無縁ではなくなつてくるようにも思わ

れるのであるが、しかし室町期にあつては京畿においてもはや「た」の用例は珍しくないものであるから、やはり(e)は(a)(b)(c)と同列に置いて眺めるよりも(f)(g)(h)などと等しく、口頭語的色彩の濃い現われの一端として捉えるべきではないかと思うのである。

## 〔注〕

1、越後では「婆に逢つて爺にあわぬ。(答) 腎」『ことば遊び辞典』八二頁) という形で残っている。

2、この謎立ての記事は、寛文版十冊本はもとより、天理圖書館藏の明應三年(一四九四)寫本にも見えない。『太子傳』諸本の間にはかなりの出入があるようである(高橋博士)。

3、謎ではないけれども、蓬左文庫藏の韻鏡私書(室町末期寫、一冊)に

父ニヤシナワル、事ヲ在リ母ニヤシナワル、事ナシ(1ウ)

という記述がある。五韻を父、三十六聲を母、反切を子と見立てているようである。

4、かようなエーイ轉化の例については、抄物にも「痛」(高野山大學藏の長恨歌琵琶行抄、寫一冊)のときがある。なお前田勇氏「近世俗語ノート」(大阪學藝大學紀要34年3月一七七頁)などを参照。ただし ye ↓ i の際の直上音が必ずア段音であるとは限らない。オモイラクハ以爲V(京都大學圖書館藏の漢書抄)のごとき例もある。

蛙は、宸42「うみなかのかへる つた」(卯と巳の中の辰が返ると爲)や、宸48「おきのつり舟浦によする あまかへる」(海人歸る↓蛙廻)ではカエルで、易林本や日葡辭書には兩形ある。が、日葡辭書の Cayetu の條には實際にはカイルと言った旨が記されており(日本古典全書『吉利支丹文學集下』二四九頁頭注)、京大國文研究室藏の林才錄(23オ)、伊曾保、下學集などではカイルである。

5、たとえば、宸181「あはせはせふくろひはむひはなかはやふれぬ あはひ」の解き方に二通り考えられる。①アハセ(拾

のセ(背)がふくろび、アハが残り、ハムヒ(半臂)が半ば破れてヒ、合してアハビ(鮑)。(2)アハセからハセがふくろび、アが残り、ハムヒの中(なか)のムが破れハヒ、合してアハビ。謎の創作者は①と②のいずれを念頭においていたかは不明であるけれども、両方とも正解としてよいと考えられる。

6、たとえば拙稿「四海入海について」(『國語國文』41年5月)中に述べたように、四河入海の東福寺本に

流落シテ無<sup>ナ</sup>窮<sup>キウ</sup>ソ、セウドモナイ體ソ(一下13オ)

と開合の誤つてゐるのは、兩足院本では「シャウトモナイ體ソ」と正しく、他の抄物に左のようにあるのと符合する。

ウキ草ハ水ノ上ニヲイテアルホドニアトハナイソ、人ノ身ノウイテシャウドモナイニ比シテ云タソ、ウカレタ、ヨイアルクヲ云ソ(玉塵抄、五72オ。叡山文庫本も同文)

雲游ト云ハシャウドモナウ諸方ヲアルキマワルヲ云ソ(米澤圖書館藏詩學大成抄、一11オ)

7、類33の「せうじ」(障子)などの誤寫も、すべて、宸10「もろこしに湧やしろのあれはこそまいらぬまでも身をはきよむれからかみしやうし」などのように訂されるが、この解きの過程の「精進」を「しやうじ」と言うことについては、抄物に「五戒十戒ヲ一日一夜シャウジケツサイシテ戒ヲタモツ」(玉塵抄、八5ウ)とあり、日葡辭書や安原貞室の片言(日本古典全集九頁)にも見えている。

8、「結う」と「言う」とを懸けて、語幹をこの謎の場合のように「い」としたものは、ほかに

宸125 いゝそめし日より心をつくすかないつあひそめてうちはとくへきめつくし

があり、反對に語幹を「ゆ」としたものには

宸16 人をうらみてむかしをかたる いれもとゆひ

がある(右の解きは辭典の「煎れ元言い↓入元結」よりも、内遠の「人↓(裏見)↓入」の方が優る)。

動詞「言う」の語幹をユとし、語尾と合わせて「言ひ」という言い方については土井先生が「見参」とともに伊曾保から例

中世の謎について

を擧げて次のように述べておられる。

「ゆひ」や「げんざう」は、日葡辭書において、「いひ」や「げんざん」に比して品位の劣つた、よろしくない語と説かれたものである。これらは、嚴密な規範意識を以て臨むならば、かゝる評價が加へられるにしても、現實の話したことばの世界で廣く通用したことばづかひなので、伊曾保物語のみでなく、同じく天草版平家物語でも、特に會話の部分に使はれてゐる……『吉利支丹文獻考』八〇頁)

抄物にも、各臣下ニユイツケテサスルホトニ失モ得モウレイカナイソ（兩足院藏周易抄、四26ウ）

セメテ我カ來タト云事ヲ知ラセイト思ヘトモユイヨカウ人モナイヨ（兩足院藏、三體詩法抄、二28ウ）

等のように用いられ、易林本（「言成」・「物云」等）や大文典（土井先生譯書の索引参照）などにも見いだされる。ちなみに「げんざう」も抄物に左のように用いられている。

扶持ヨウケウト思ウ者ハ吾ガ名姓ヲ紙ニカイテカウ云者ガ御目ニカヽリタイ御體ヨマウシタイト云テソノカイタ名ヲ出ソソコテヨウテゲンザウスルソ（玉塵抄、四50オ。「御體ヨマウシタイ」は今日のような感謝の意ではなく、きわめて原義的な意味で用いられている）

なお、イヅユの例は既述の「圍爐裏」のほかにも「ゆむけのそて」△射向けの袖▽（府立総合資料館藏の百二十句本平家物語）・「大ユビキヲカク」（仁和寺藏の山谷抄）・「マイ」△眉▽（玉塵抄、四56ウ。蘭をマイと記す例も上記の山谷抄に見える）等々が散見する。

9、蒙求抄の寛永十五年版に見える左引の「大ナマス」も「大鯰」ではなくて、「大なる升」の意で、混同例とはならない。

胸ヲサイテミタレハキモノ大ナ事ガ大ナマスホトニアツタソ（五10ウ）

10、京大國文研究室藏の心經抄などにも「ジャ」が見られる。

11、この解きは内遠「古事紙」や辭典「越し紙」は正しくなく、湯澤博士や辭典一三六頁の『新撰何曾遊び背紐』の謎「こし



かみ 文」の解法と同様に、いろは歌からフとミとはコとシとの上（かみ）にあるとして解くべきである。當時の謎の中には、いろは歌や十二支に關するものが散見し、宸筆本には前者が六題、後者が四題數えられる。

12、宸 131 の答は草履（↑城理）であるが、當時草履をジャウリとも言つたことは、七十一番歌合（群書類従五〇三卷）の「ざうりつくり」の挿繪の詞の「じやうりく」や下學集「草履」によつて知られる。

13、「證」の音は下學集では開音であるが、陽明本では合音「セウ」。

14、「ホウラ」と記されず、「ホヲラ」と記されていることは、完全な長音（ホーラ）ではなく、「ホ・ヲ・ラ」と發音されていたかと思われる（拙稿「オ段音に後續する『ほ』の長音化過程」（濱崎賢太郎氏と共筆）——『國文學攷』37年5月——参照）。

15、この謎は、易林本（二四四頁）等に當時の京都の東西の通りが一條から九條まで擧がつているのによつて、「京の眞中↓五條」と解き得る。内達の「京中」といひては地名多くひろきを五條とのみきかせんは少し荒涼なるいひきまなり」という批判には必ずしも同調できない。

16、宸 155 「あらしの後もみち道をうつむ 霜」の傍線部は四段活用。

17、この謎の人名は内達の「保昌」以外に「北條」が考えられる。いずれにせよ謎に言うような事實については未詳であるが、條の字音が當時一般にはヂヤ行合音「デウ」である中に、天草平家では北條に限つて Fojo とヂヤ行開音に記していて右の謎のかなづかいと符合するからである。

18、小稿で取扱つてゐる謎集の中では、宣胤が語法的に最も古格を保つてゐる。

19、日葡辭書の *Giudio*（住居）は和語の「住まひ↓住ま居」から出た和製漢語と思われる。

20、物語から取材したので一番多いのは源氏物語の六題。石川氏「平安文學と中世の謎」（『平安文學研究』25）参照。

21、「かたな」がかけことばになつてゐる點は先出の宸 20（一九頁）の場合と同様であるが、①「刀と片名」と解するか、②

「刀と肩名」と解するかは、㊦でも都合よく説明がつくけれども、辭典一七二頁にすでに言うように、『新撰何曾遊び背紐』の㊦説は當時の用例に缺けるようなので㊦と考えるべきであろう。三手文庫藏の神代桃源抄（下）に

祖ノ御名ヲトツテ彦火々出見尊ト申ソ、コチニ父ノカタナヲトツテツクソ（48オ）  
日本名

とある。

22、寒86「やすき事わすれた なにそ あんどん」も同様にして解き得るが、辭典一七九頁では本文後半の誤脱から解きに誤りがある。ドンナ者ハ辛苦シテクルシンデシルソ（玉塵抄、八10ウ）

23、「右」の用例は玉塵抄（七63ウ、八64オ）や觀世流の草子洗小町などにある。漢字の字形に關する謎は宸筆本に二十題ある。

24 宸筆本では助動詞（む、らむ）の場合はすべて「む」と表記されているが、それ以外の語については、例えば假名と鈍（類聚名義抄）とのかけことを「かむな」と記す例（宸30）でも知られるように、「む」を、「ん」と區別して書いている根據が定かでない。

25、金田一博士は、神奈川等の方言で「行つたよ・見たな」等を「行ッターヨ・見ターナ」等と言うことから、金葉集の歌も、

ほんとうは「キター」と「タ」がのびていたが、それを表記するすべがなく、短くキタと表記したものかも知れない。

と述べておられる。ところで金田一論文だけでなく、土井先生・森田博士の『國語史要説』にも同様の佐伯説が引かれているけれども、金田一博士所引の佐伯博士『國語史要』——昭和25年の學生版一二二頁——には、「た」は關西より關東の方に早く起こつたろう、というような明記は見えない。

〔後記〕 ご指導ご教示を賜わつた土井忠生先生・高橋貞一博士・池田武雄教授にあつく御禮申しあげるとともに、資料に關して學恩を蒙つた石川廣氏・天理圖書館・叡山文庫・兩足院・陽明文庫・京都大學・國會圖書館・京都府立総合資料館・宮内廳書陵部・蓬左文庫・三手文庫・西教寺・高野山大學・神習文庫・米澤圖書館・仁和寺等にも深甚なる謝意を表します。

なお、この小稿は昭和四十一年度文部省獎勵研究費による研究の一部であることを付記する。（一九六七、一一、一八）